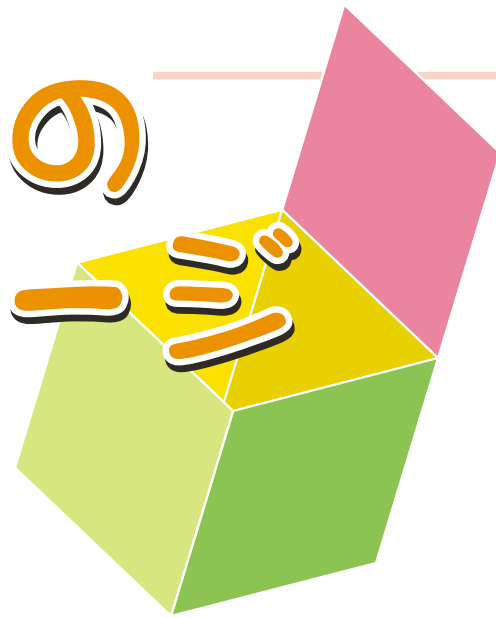


GALLERY ギャラリー



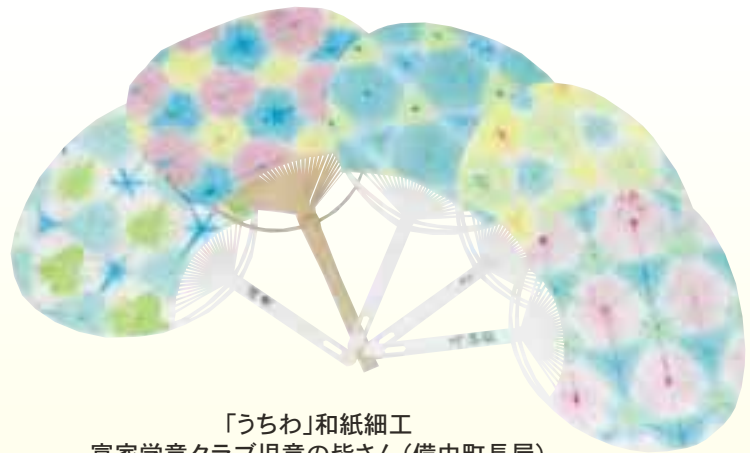
「仔猫」切り絵
中山 町子さん(高倉町田井)



「秋草」手描き友禅
川上 孝子さん(玉川町玉)



「黒髪の女性」切り絵
千崎 千香子さん(有漢町上有漢)



「うちわ」和紙細工
富家学童クラブ児童の皆さん(備中町長屋)



「あゆのつかみどり」写真
野口 繁男さん(津川町今津)



「絵手紙いろはカルタ」(部分) 絵手紙
高木 富恵さん(成羽町下原)

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
- 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
- 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
- ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
- 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先
〒716-8501 (住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係 ☎0210
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
- ※提供いただいた写真等は返却できません。

市民へ

文芸たかはし

短歌

(敬称略)

高原から見降ろすパノラマ備中湖キャンプの思ひ出心に刻まん
井上 明彦 (備中町平川)

梅野 八郎 (松山)

ハーリヤーサーの声にあわせて踊る輪に老友の顔あり所作若やぎて
小野はる恵 (原田南町)

去年までは夫が焚きたる迎へ火を今宵は夫を迎へむと焚く
梶谷 文江 (石火矢町)

玉の汗滴るほほにそと吹くやさしい風は秋のささやき
亀石恵美子 (川上町仁賀)

継ぐ者のなくて田畑のあれはてて廻りは白く芒ゆれとぶ
芝吹美代子 (落合町阿部)

昨日までの猛暑忘る、今朝の窓たしかなる立秋の風の触感
田中 弘子 (川上町領家)

うちわ手に星空眺め涼をよび山のそよ風風鈴の音に
原田 由き (高倉町飯部)

葱の種素麺すすする夏のため黒胡麻の如祖母は播きたる
平 初音 (高倉町田井)

不如帰はげしく啼きて飛びゆけり茜の空のうすれゆく中
榊上 秀雄 (備中町西山)

俳句

野良仕事暑さをしのぐ木陰かな 赤木 文子 (備中町西山)
過疎の村コスモス咲かせ人あふる 平松 幾代 (長寿園内)
秋めくやはさみの音や松手いれ 結城 成子 (宇治町宇治)

川柳

運動会昔はハダシ今は靴 藤井タツ子 (備中町西山)

地名とふるし

二十三 新町

「新町」は今の高梁市新町。北は小高下谷川から南は伊賀谷川までの町で、西側の本町通りや東側の片原町・石火矢町などと平行して北から南へと走る町筋で、近世の「堅町型城下町」の特色をそのまま残している町通りの一つなので。

江戸期の松山城下時代は、実質的な大手機能をもっていた「惣門」に最も近い町屋地区として本町と並んで重要視されていました。「新町本町元和二年(一六一六)に出来下町鍛冶町元和四年に出来下町」とあり、江戸初期に小堀作助(遠州)によって最初に取り立てられて出来た町人町だったのです。

「前掲書」に「新町本町鍛冶町紺屋町共に是迄小堀様御代より御除地に仰付られ候」とあり、また、その後の水谷氏の時代(寛永一十九年〜元禄六年一六四二〜九三)になつても「御除地に被仰付候」と記録され、その後「新町」は本町・下町・鍛冶町・南町などとともに「五丁の町」の一つとして「往古より無高之地子御免除之地にて一切町方へ掛り候之事御座無候」(松山六ヶ町差出帳)「市図書館」とあるように、「新町」は地子(税など)免除の町として保護されてきたのです。

『元禄七年(一六九四)正月改 御家内之記』「水谷史」によると家数九六軒とあり、延享元年(一七四四)には、世帯数一五六軒 男二六八人 女二三九人 本家五六軒 借家一〇〇軒(松山六ヶ町差出帳)と記録されています。これより前の石川総慶時代(一七一〜一四四)の家数八九(松山城下絵図)市図書館)に比べると戸数が増加しているのです。

延享元年頃「新町」の役人の町年寄は亀屋十郎右衛門で役料米五俵のほか塩改役として塩口錢(塩一俵につき六厘二毛余)を取り、そして目代は役料五俵で吉兵衛となつていて町方屋敷から口錢(人数割で取る税)を徴収していました(増補版高梁市史)。また、町には郷宿(百姓が

城下町に向いたとき御用全般にわたり手助けする宿)が一二軒あつて関係の村から毎年米一俵を世話料として取っていました。

「新町」は天保三年(一八三二)の大火により全焼していましたが、復興した嘉永二・三年(一八四八・四九)頃から安政初年(一八五四)頃には、屈指の商家として大年寄難波平五郎(酒造)、目代米山健次郎、口入灰屋紀三郎、口入屋福島屋定八、宿屋の重屋、成羽屋、そのほか下駄屋、豊屋、肴屋などの商人がいた(昔夢一班)ことが書かれています。

「新町」は片原丁などの家中屋敷町と隣接して「家中」と町家は垣一と重隔つるも交際は更に無之。夫故家中の小供と町屋の小供とは言語も多く違へり。家中は伊勢の国より引越したるもの多く自然に其言葉伝りたるも、町屋は備中土着にて趣の異なるも尤の事なり。維新後、小学校へ混浴登校すること成りて自然と一致したるやに覚ふ(昔夢一班)とあつて城下町時代の様子が伺えるのです。

現在の「新町」は近世城下町プランをそのまま留める「堅町」の新町通りと、西の本町を結ぶ菊屋小路(見通しを悪くして折れ曲つている)など三本の小路(横町)、そして東の片原町へ通じる一本の小路が残っています。

「新町」の「新」の付く地名は各地に見られ、意味は「古」「元」などに対して「新しい」という意味なのですが、高梁の「新町」は、本町とともに松山城下で「最初に出来た町」、「新なり」という意味から付けられた町名で古くは「あら(新)まち」といわれたこともあつたのです。(文・松前俊洋さん)



南から見る新町通り